

## エドモンド・モレル研究と私

### 紹介者



**芦田 昭充氏**

商船三井 取締役社長



**森田 嘉彦氏**

国際協力銀行 副総裁



### 次回は

**重久吉弘氏**

(日揮 取締役会長・CEO)  
にご登場いただきます。

ロンドン駐在時代からの研究活動をなお継続中。実態は、目下、ほとんど中断状態なるも、将来の再開を期している。

テーマは英国人技師エドモンド・モレル。新橋・横浜間鉄道建設の主任技師として1870年4月に来日、わずか1年半後の71年11月に死去。彼の死を追うように、12時間後、日本人妻（といわれている）も死亡したとされる。その間、鉄道建設の他、公共事業を一括して扱う独立官庁の設置やエンジニア大学の創設を提言、大隈重信・伊藤博文らによって実現している。いわば、近代日本におけるエンジニア育成、そのためのインフラ整備の恩人のひとりといえる。伊藤博文は、後年、「モレルの考案は日本の将来をおもんばかり、鉄道建設と共に人材を養成せんと希図せし形跡は明白なり。是れ余が彼の我日本に忠実にして其人を得たりといふ所以なり」と語っている。

実は、ロンドンからの帰国直後、日本経済新聞最終面「文化欄」で彼について書く機会を得たが、当日の「私の履歴書」はマハティール、下

欄の連載小説は渡辺淳一「失楽園」と、あまりにも相手が悪く、私の渾身の一文は、ほとんど顧みられることもなく埋もれてしまった次第。

他に調べている人も多くはないだけに、モレルについては世界トップクラスの研究者との自負が、心の支えとなっではいるものの、ほとんどお声が掛からないという現実を前に、こうした微かな心の支えも打ち砕かれてしまいがち。2002年はわが国鉄道開通130周年で様々な記念行事、シンポジウムが開かれた年。小生、秘かに、お声が掛かるのを待っていたものの、何事もなく静かにその年も過ぎていきました。

今回、リレートークへの寄稿という機会をいただき、PRさせていただいた次第。内心、何らかの反応があるかなとの、いつもながらの虚しい期待を抱きつつ筆をとってはいるものの、恐らく今回も静かに時が経っていくことと思います。

多少勢いのよい表題と書き出しが、こうしたお願い口調で終わるところにモレル研究者のこれまでの辛苦の日々を読みとって頂ければ幸いです。